

神戸ミュージアムロードコンペ

「Sea to Zoo」いのちの進化と共生プロムナード

—— 歩きながら学べる 1.2km の道づくり ——

一、企画背景

兵庫県立美術館から王子動物園までの約 1.2km ミュージアムロードエリアには、海辺空間、美術館、公園、商店街、動物園といった多様な都市・自然資源が連続的に立地している。港・文化・緑・まち・動物という異なる要素が近距離に集まるこの構成は、神戸の中でも非常に特徴的であり、本来であれば歩きながら多様な体験が得られるポテンシャルを持つエリアである。

一方で、このロードは JR 線や幹線道路によって分断されており、歩行者にとって連続的に楽しめる導線とはなっていない。各施設はそれぞれ高い魅力を有しているものの、相互の関係性や物語性が十分に共有されておらず、訪問者は「点」として消費するにとどまっているのが現状である。

しかし、このエリア全体を俯瞰すると、「海から陸へ、自然から人へ」という生命の進化の流れを重ね合わせることができる地形的・空間的構造が潜在的に存在している。この「目に見えない物語」を可視化し、歩行体験として再構成することで、散歩・学習・観光が融合した新たな価値を創出できると考えた。

そこで私たちは、神戸ミュージアムロードを「いのちの進化と共生プロムナード」をテーマに、四つのゾーンに分け、それぞれに異なる特徴を持たせる計画としている。

二、企画目的

1. ミュージアムロードの周りに「生命の進化を歩くプロムナード」として再設計し、歩くこと自体を学びに変えること
2. 海 → 道 → 駅周辺 → 動物園周辺という、これまで分断されていた資源をひとつの連続したストーリーとしてつなぐ。
3. 地域・学校・動物園が連携し、計画で終わらせず、20 年後も使われ続ける持続的なプロムナードを実現すること

三、四つのゾーンの全体概要

① 海辺ゾーン（美術館周辺）— 命のはじまり

海の風・波・防災と自然を感じながら、「生命は海から始まった」ストーリーの入口となるゾーン。

② 緑ゾーン（美術館～JR 灘）— 多様な命の成長

植物を中心に、命が育ち、広がっていく過程を体感できるゾーン

③ まちゾーン（JR 灘周辺）— 人の交流

交流ベンチ・スタンプ台・QR 紹介などを通じて、人と人、地域と来訪者がゆるやかにつながるゾーン

④ 動物ゾーン（王子動物園周辺）— 共生の未来

足跡スキャナー、命のメッセージウォールなど、生命と向き合い、未来の共生を考えるゾーン

四、各ゾーンの提案

1.海辺ゾーン（生命のはじまり）

01. スタートゲート（Sea to Zoo の入口）

「ここから物語が始まる」ことを直感的に示す導入ゲート。

02. 進化フットプリント（水生動物から陸生動物へ）

各動物のイラストを描きながら、自分の歩行に合わせて生命の変遷を直感的に体験できる。

03. ミニ防災体験ブース

高潮柱や「備えの知恵」パネルで、自然の脅威をやさしく理解できる学習拠点。

04. QR 音声スポット

海の音、高潮、風の仕組みなどを解説付きで、誰でもその場で学べる仕組み。





2. 緑ゾーン (多様な命の成長)

01. いのちのタネ基金 (Seed of Life Fund)

寄付 (500 円〜) で植物の種を受け取り、自宅または現地で育てられる仕組み。

02. 命名の木 (My Tree)

訪れた人が木を植え、名前を付けて育てる参加型プログラム。

03. 名札プレート

植えた木の横に設置し、名前・日付・メッセージを記録。

04. タネボックス (種+育て方キット)

説明カード・種・QR 案内をセットにした配布ユニット。



3. まちゾーン「人の交流」

01. スタンプ台 (旅の起点)

木材基調の屋根付き台
冊子ボックスと紹介柱を併設。

02. 交流ベンチ+会話パネル

昔の写真・小さな生き物の豆知識で話題を誘発。

03. ピクニックスポット

緑に寄り添う小さな「座れる余白」

昼食・待ち合わせで自然と滞在が生まれる。

04. 店舗 QR 紹介柱

店舗の短い物語を提示し、地域理解の入口に。



4. 動物ゾーン「共生の未来」

01. いのちの足跡スキャナー

動物の足跡が光るセンサーライトで展示への誘導と、静かな光モードを備えた回遊演出。

02. デジタル命のメッセージウォール

動物の習性や人との関係を学べる電子表示で畏怖の念を育み、人と動物の共生を促す。



五、未来の構想

1.1-5年後「使われはじめるプロムナード」

各ゾーンの基盤となる施設や展示が段階的に整備され、「海から動物園へ」という生命の物語が直感的に感じられるようになる。市民・学生・来訪者がこの道を散歩や学習、滞在のための日常的な空間として利用し始め、「歩いて学べる道」として社会に認知されていく。

2.5-10年後「育ち、関係が広がる場」

参加型の取り組みが継続的に積み重なり、人と場所との間に記憶や愛着が育まれる。地域、学校、美術館、動物園の連携が定着し、この道は単なる通過空間ではなく、交流と学びが重なり合うネットワーク型の場として機能し、再訪を促すプロムナードへと発展する。

3.10-20年後「共生を学び続ける文化的風景」

プロムナードは都市の中で長期的に成長し続ける「学びの風景」として、自然に受け継がれていく。子どもたちはここで生命や共生について学び、大人は人と自然の関係をあらためて問い直す。この場所は、過去・現在・未来をつなぐ公共的な文化資産として定着し、社会や環境の変化に応答し続ける存在となる。

・本提案で使用しているイメージ図は、すべてAIによって生成されたものである。

